

2012年度 関西学院初等部 学校評価を終えて

関西学院では、学校教育法の改正を契機として初等部・中学部・高等部が互いに連携をとりながら、整合性のとれた学校評価を実施する制度を構築してきました。2012年度はこれに加え、学校関係者評価の性格も併せ持つ、第三者評価を組み込んだものとなりました。

2012年度初等部は、「キリスト教主義教育」「教育課程」「生徒指導」「研修」の4項目に重点を絞り、評価項目として設定しました。

評価の実施にあたっては、各項目について児童・保護者・教員にアンケートを行い、それぞれの立場からの意見を聞くことにより客観性を確保すると共に、多様な考えも重視しました。

今年度も各項目についてまず現状を説明し、アンケートの集計結果も参考にしながら評価・分析を加え、今後の改善の具体的方策を示し、自己点検・評価としました。

さらに、それらについて、教育学部の2名の教授、中学部部長、高等部部長、評価情報分析室室長のご意見を第三者評価/学校関係者評価とし、合わせて初等部の学校評価としてまとめました。

本日、関西学院評価推進委員会（2013年3月22日）において初等部の学校評価が協議、承認されました。

関西学院初等部は、学校評価を教職員一人ひとりが真正面から真摯にとらえ、自らの力でその課題を探り、その課題に向かって誠実に向き合うことによりさらなる改革を図ります。

より質高き初等部の教育活動が、多くの人々から支持・信託を得るためにも、初等部に集う人々の“Mastery for Service”の精神を基にした正直さ、真面目さ、誠実さ、そして善良さが認められるステージをめざしてまいります。

2012年度初等部の学校評価を項目別に次頁以降に記し、ホームページ上で公表することにより社会的信頼を高めます。

2013年3月22日

関西学院初等部
校長 福田靖弘

学校評価シート

【キリスト教主義教育】

現状の説明

関西学院の建学の精神である「キリスト教主義による全人教育」を、どのように初等部の教育の中に具体化していくかが、開校から現在に至るまでの変わらぬ課題である。

初等部では何よりも毎朝の全校礼拝を開校当初から大切に考え、その充実に力を注いできた。毎朝、聖書の言葉に耳を傾け、讃美歌を歌い、共に祈ることを通して、児童と教職員が心をつにし、関西学院がその歴史の中で大切にしてきた建学の精神を心に刻み続けている。

校長、宗教主事、そして教職員が礼拝の中で語る内容は多岐にわたる。しかし、児童に伝えるべきメッセージは、スクールモットーである「Mastery for Service」（社会と人のために自らを鍛える）そのものであり、聖書が児童たちに語るメッセージである。

教職員のみならず、朝の礼拝では毎週木曜日、3年生以上の児童が司会、お話、お祈りを担当し、日々の生活や自分たちが経験した様々な事柄を「Mastery for Service」や聖書の視点を通して話をしている。児童は初等部に在籍する6年間で最低1回はこの礼拝での役割を担うことになっており、初等部で学び、感じた事柄をメッセージとして全校児童、教職員に伝えるという大切な役割を担うことになる。また児童は週に1時間の聖書科の授業、各宗教行事、宿泊行事などを通して、キリスト教の精神と価値観に触れ、「Mastery for Service」の意味や、人としてどう生きるべきかについて考える機会をもっている。

キリスト教主義教育の担い手である教職員に対しては、キリスト教や学院のキリスト教主義教育についての研修会を実施し、新規採用の教職員に対しても、オリエンテーションの中で、同様の研修会を実施している。

また保護者に対しては全学年の保護者対象の聖書講座（年間3回）に加え、PTA活動の一環として各学年ごとの聖書に親しむ会（PTA）を実施し、キリスト教理解を深めるための講座を開催している。また新入生の保護者に対しても、入学前の2回のオリエンテーション、入学後のオリエンテーションで、初等部のキリスト教主義教育についても講話を行い、キリスト教主義教育の理念を共有する機会をもっている。

評価・分析（アンケート結果を含む）

今回の学校評価のアンケートにおいては、保護者、教職員が前年度よりも全体的に肯定的な評価の割合が上がった（これについては後述）。逆に児童に対する「こころの時間や聖書の勉強は大切なことだと思いますか」との質問に対しては、肯定的な回答は85%と、前年度よりも4ポイント下がった。3年生以上の児童約360名を対象としているが、3年生、4年生の肯定的な回答が97%なのに対して、5年生、6年生の肯定的な回答が72%に留まっている。

学年が上がるにつれて、肯定的な回答の割合が若干低くなることはこれ

までのアンケート結果からもある程度予測していたことであるが、今回、高学年、特に6年生児童の肯定的な回答が低いことは重く受け止めなければならない。原因を探り対策を講じる必要がある。

一方、保護者への「学校は、キリスト教主義教育の理念について、保護者と共有する機会を設けているか」との質問に対しては、肯定的な回答が昨年度の86%から92%に増加している。全学年の保護者を対象として聖書講座に加えて、2012年度からPTAと協力して開催している「聖書に親しむ会」を本格的に実施したことが、ポイントの増加につながったと考えられる。また「学校は、キリスト教主義に基づき、人を思いやる気持ちや態度を育てている」との質問に対しても、肯定的な回答が増加し80%を超えた。初等部の教育活動を通して、我が子が人を思いやる気持ちや態度をもった人間に育っていると考えている保護者の割合が80%を超えていることは喜ばしいが、そう考えていない保護者が17~18%いるということを忘れてはならず、初等部の教育活動全般にわたって、キリスト教主義教育の理念を具体的に生かす工夫が必要である。

教員への「私は、礼拝や研修を通してキリスト教主義教育の理念を共有している」との質問に対しては今年度、100%が肯定的な回答をしており、研修会はもとより、児童と共に日々の礼拝がキリスト教主義教育の理念を共有、確認する機会として受け止められていることが分かる。また「学校はキリスト教主義教育を学校生活の中で具体化している」との質問に対しても肯定的な回答が96%と昨年度よりも20ポイント上がっている。教職員一人ひとりが自分がキリスト教主義教育の担い手であるという自覚をもって、子どもたちに接していることの表れである。

改善の具体的方策

初等部の児童が、学年を増すごとにキリスト教主義教育の大切さを実感し、聖書の価値観を学ぶことを通して、関西学院のスクールモットー「Mastery for Service」を実践する者へと成長していくことが学校としての願いである。

一人でも多くの児童が、関西学院のキリスト教主義教育の土台である礼拝を大切なものだと実感できるように、礼拝の内容はもちろん、そこで語られるメッセージがスクールモットー「Mastery for Service」に基づき、児童に喜びや希望を与えるものにしていかなければならない。礼拝を丁寧に、そして大切に守り続けていく姿勢を児童と教職員が共につくりあげていくこと。そのためにも、教職員が建学の精神、スクールモットー、聖書の価値観に対する共通理解をもつことが必要である。そのための研修の充実はもちろん、日々の学校の歩みの中で、常にそのことを意識できる工夫をしていく。

また建学の精神に基づいた教育活動には、保護者の理解や協力、連携が不可欠である。学校が何を大切にし、何を児童に伝えようとしているのかを、繰り返し保護者に伝えていく。学校と保護者が共に児童を育てていくという意識を強く持つことができる工夫や関わりを積極的にもっていく。

第三者評価／学校関係者評価

○毎日欠かさずに礼拝の時間を持っていることは、とても重要な意味がある。しかも、毎朝しっかり大きな声で全員が讃美歌を歌い、担当する先生や、仲間の児童のお話を聴く姿勢を大事にしていることは、私も何度も見させていただいたが、高く評価できる。礼拝や聖書の授業を参観させていただくたびに、心を打たれる。また、保護者の理解も高い。今の時代、保護者の方も心の教育を求めておられる証拠だと思う。今後も礼拝やキリスト教の授業を大事にされることを願う。

○開校以来、朝の全校礼拝等、学院の建学の精神である「キリスト教主義による全人教育」を児童の心に刻みつけていくための営みを継続して行っていることは評価できる。さらに児童に対して礼拝における主体的なかわりを求めることや、保護者に対する「聖書に親しむ会」の実施など、具体的かつ実効性の望める試みを年々工夫し取り入れていることも評価できる。

ただ、「評価・分析」欄の『「学校は、キリスト教主義に基づき、人を思いやる気持ちや態度を育てている』との質問に対しても、肯定的な回答が増加し 80%を超えた。』に見られるようなアンケート結果の解釈には慎重を期することが求められよう。昨年と同じ質問に対する肯定的な回答が 79 パーセントであり、実質 2 パーセント弱の増加であったことからすると、それに続く残りの 20 パーセント弱の回答に目を向け、それを今後の課題としてとらえた分析にとどめるだけでよかつたのではなかろうか。

「評価・分析」の欄の「高学年、特に 6 年生児童の肯定的な回答の低いことは重く受け止めなければならない。その原因を探り対策を講じる必要がある。」という分析は重要である。学びを重ねるに従って肯定的な回答が高まっていくようになったとき、教育の成果・浸透が順調に図られているといえよう。心や生き方にかかわる教育は、理念の伝達や活動におけるマンネリ化を避け、いかに自覚と内発的な行動を生み出すかが課題となろう。そのためには教職員や保護者も含めて、こころの時間や聖書の学びの大切さを特別な場だけではなく、日常的な場でも実感できるような学校・家庭生活の実現のための努力が一層求められよう。

○教員の 100%が、礼拝や研修を通して、スクールモットー「Mastery for Service」やキリスト教主義教育の理念を共有していることはすばらしいことであり、とても大事なことであると考えている。教職員はキリスト教主義教育の担い手であることから、今後も研修を深められ、初等部の教育活動全般にわたって、キリスト教主義教育の理念を具体的に生かす工夫をされることを願う。

○初等部教員が、礼拝や研修を通してキリスト教主義教育の理念を共有していると高く認識していることは、今年度の取り組みの成果であると思う。

何ととっても小学校 1 年生と小学校 6 年生という精神年齢の 5 年の差が大きく、心の発達の度合いを考慮した取り組み（礼拝など）が必要なのではないかと考える。特に 5、6 年と学年が上がるにつれて肯定的な回答

の割合が少し低くなっていくのは、毎年同じメッセージを受け続けていることへの反発かも知れないし、それは自我の成長とともにある意味当然のことかも知れない。

- 初等部のキリスト教主義教育について、教員や保護者の間での評価が向上していることは評価できる。一方生徒の間でのその評価が学年により違いが大きい点（高学年でその「大切さ」の評価が下がる）は少し気になる。子どもの成長に応じた内容の工夫が求められるのではないだろうか。

学校評価シート

【教育課程】

現状の説明

教育理念「キリスト教主義に基づく全人教育による人格形成」を念頭に置き、本年度においても、シラバスを作成し、計画的に授業を行ってきた。また、初等部の特色的な教育の一つとして実践しているKGタイムについても月～金まで毎日設定し基礎的、発展的な学力の定着をはかってきた。特に、「力の時間」では、児童の実態に合わせた身につけさせたい学力にあった指導内容を精選したり、「風の時間」では、指導内容を明示化したシラバスを作成したりして計画的に学習を進めた。

児童の学力については、各学年に合わせた評価規準を設け、絶対評価として把握し、通知書として保護者に伝えた。また、個人懇談会、家庭訪問、学級懇談会等を通して、家庭との連携を深めるようにした。

主な学校行事である体育祭、文化祭、作品展については、教科部会や実行委員会を組織し、その内容や運営上の課題について話し合うなどして、よりねらいに即した行事になるようにした。

評価・分析（アンケート結果を含む）

目標として掲げている「子どもの自ら学ぶ意欲を育むKGタイムの活用」について、「学校は基礎学力が定着する授業を行っている」という項目で、75%の肯定的な回答を得ている。しかし、「基礎的な学習だけでなく発展的な学習も取り入れながら授業を行っている」という項目では、68%にとどまり、押さえるべき基礎的内容については評価されている一方、保護者の比較的意識の高い発展的内容については十分評価されているとは言えない。また、「学校はわかりやすい授業をするための工夫をしている」という項目に関して、保護者は76%、児童の「授業はわかりやすいですか」という項目で、87%の肯定的回答が得られている。授業の工夫について教員が日々研鑽していることが評価されていると考えられる。

「学校は子どもの学力を把握している」という項目で、80.4%の保護者が肯定的評価をしている。教員アンケート「児童の客観的な学力把握に努めている」でも、91%が肯定的評価をしている。しかし、保護者アンケート「学校は、子どもの学力を保護者にきちんと伝えている」という項目で、72%の肯定的評価にとどまっている。子どもの学力把握について評価は得ているものの、子どもの学力を十分保護者に伝えきれているとは言えない。

文化祭、作品展など学校行事に直結する芸術教育については、「学校は、音楽、美術（図工）を中心とした芸術教育を通して、子どもの豊かな感性を育成している」という項目で83%の保護者が肯定的に評価している。日々の授業、成果を発表する場である文化祭、作品展が認められていると考える。

改善の具体的方策

教育課程に関して、全体的に昨年度よりも微増であるが、肯定的な評価が得られている。保護者に子どもの学力を十分に伝えきれていない通知書については、委員会を立ち上げ見直しを行う。また、教育講座や個人懇談会、学級懇談会を通して、評価について具体的に説明していく。

発展的学習については、KGタイムを見直し、特に「力の時間」において、より論理的思考力や活用力を身に着けさせるために教材選定を具体的に進める。

第三者評価／学校関係者評価

○小学校の授業として、単に数字だけでは表せない大事な部分があると思うが、芸術や音楽の部分でも、児童や保護者の評価が高いのは、素晴らしいと思う。子どもたちの感受性や素直な発想を伸ばしながらも、学力を地道に伸ばしていけることができると願う。通知書の工夫を今後どうされるかも楽しみにし、ぜひ参考にしたい。

○シラバスの作成やKGタイムの設定など教育課程にかかわる枠組みは整えられつつあるように思う。今後はその実施や改善における具体化や最適化が求められよう。

アンケート結果の扱いにおいては、他の評価項目と同様「強くそう思う」と「どちらかといえばそう思う」を肯定的評価として集約し評価・分析を行っている。その結果、教員アンケートの「児童の客観的な学力把握に努めている」や「評価規準により、的確な評価を行っている」は、ともに91%強が肯定的評価をしていることになるが、その内訳をみると、前者は70.8%、後者は83.3%が「どちらかといえばそう思う」であり、その比率が高い。こうしたところに絶対評価のやり方や評価規準の理解・運用等に悩む教員の姿を垣間見ることができる。今後そうした点の改善を図ることが必要であろう。

教師評価に関して言えば、必ずしも教師が思っているほど客観的かつ的確に子どもの学力をとらえているとは限らない。学力把握や評価の精度を上げるよう努めることは当然の責務ではあるが、一方でそうした現実も謙虚に受け止め、子どもや保護者との間に対話的評価を位置づけていくことも必要であろう。通知書作りにおいても個に応じた情報が記載された、保護者や子どもと教師との間における情報の往還を生み出す通知書を作るようにすることが求められる。そうした通知書に載せられた一人ひとりの具体的で個別的な資料をもとにした説明を行うように心がけたいものである。

○シラバスを作成し、計画的に授業を行っていることは評価できる。また、評価規準をもとに的確に評価した通知書を通しての保護者へきちんと伝達できていることもすばらしい。ただ、授業内容の質をどう高めていくかが問題と思われる。

改善の具体的方策にもあるように、教材を工夫するとともに、より論理的思考力や活用力を身に着けさせるための授業の在り方を研究していく必要があると思われる。

- 中学部や高等部のように評価を点数で表さないのが、こどもの学力を十分に伝えきれていないという意見もあるが、小学校という段階を考えると、ある意味それでよいように思う。こどもの学力をきちんとした（画一化された）物差しで測ろうとするのではなく、将来に色々な可能性を持ったおおらかな学力の把握でも特に低学年の内はいいのではないかと考える。中学、高校とステップアップしていく中で、各自の学力をより鮮明に、客観的に認知できるようになればいいと思う。
- 目標として「子どもの自ら学ぶ意欲を育む」が掲げられているが、児童によるアンケートで、「自分で調べたり考えたりすることが多いですか」という問いへの肯定的評価が相対的に低いという点が少々気になる。小学生の段階で難しい事かもしれないが、考慮の余地があるように思う。

学校評価シート

【生徒指導】

現状の説明

初等部の児童には、『関西学院の一員』としてだけでなく『社会の一員』であることを自覚し、行動できるように日々指導を続けてきている。特に登下校に関する指導では教員のみならず、警備員、PTA、同窓会宝塚支部が組織するスカイレンジャーズの支援を受け、教育実践にあたっている。

学校生活では児童の安全委員会を中心にした挨拶運動、廊下や階段の歩行指導、遊び方指導、時刻・時間の遵守励行など、教職員が情報共有をしながら児童が学校生活を安全に送ることができるように指導を行ってきた。また、2学期末より、月に1回、こころの時間の最後に学事主任からの講話として、学校生活での留意点などを伝える機会をもつようにしてきた。

職員研修として宝塚消防署から講師を招聘し、救急救命実技研修・AED操作研修を実施したり、夏季休業中に児童の登下校路を実際に歩きながら指導の留意点を話し合ったり、危険箇所の確認をしたりしてきた。

保護者には、PTA登下校サポート連絡票で報告のあった意見や感想、初等部に寄せられた一般の方からの苦情などをまとめたプリントを配布し、登下校の様子と今後の留意点などを知らせてきた。

しかしながら、児童への規則遵守の徹底がまだまだできていないのが実情である。中には繰り返し指導を受ける児童もいる。教員同士の意思疎通が細部までできていなかったり、共通理解のずれ、指導に関する差が作用したりしているのが現状である。また登下校に関しては、昨年度よりも苦情は減ってきているものの、教員の指導が届かないこともあり、まだまだルールを守ることができずに登下校している児童がいるのも現状である。

当然ながら、指導に値する事例が発生した場合には、担任、学年主任、学事主任、副校長が連携を密にして指導に当たるとともに、保護者へも連絡し、学校と家庭とも連携して児童の健全育成に日々いそしんでいる。

評価・分析（アンケート結果を含む）

学校生活上の規則の指導に関して、昨年度のアンケートと比較すると、保護者アンケート「学校は、集団生活に関するルールやマナーについて適切な指導をしている。」に対する肯定的回答の割合は変化がない。逆に児童アンケート「学校のきまりを守って生活していますか。」に対する肯定的回答の割合は昨年より3ポイント上昇している。これは、学事主任講話で児童に直接訴えかける機会を増やし、また、担任による講話を繰り返し行うことで、児童の心にとどまったのではないかと思われる。ただ、保護者には指導の経過が浸透していないことが予想される。

しかし、挨拶の指導に関しては、保護者対象アンケート「学校は、しっかりとあいさつができるように指導をしている。」に対する肯定的回答の割合、及び、児童対象アンケートで「だれにでも元気よくあいさつをしていますか。」に対する肯定的回答の割合ともに3~4ポイント下降している。

指導を続けてはいるが、児童にも保護者にも実感として挨拶が身につけていないことがわかる。実際、挨拶に関してはPTA登下校サポート連絡票でも、昨年度より挨拶ができていなかったり、声が小さかったりしているとの指摘があり、今後の指導の課題であるとも感じている。

改善の具体的方策

生徒指導に関する課題は、学校の指導だけで完成するものではない。教員、児童、保護者の三者が一丸となりマナーの向上や、ルールの徹底をしていかななくてはならない。そのために、これまでの児童への指導はもちろんのこと、保護者へも積極的な啓発を率先していく。これまでの保護者宛の手紙による現状報告と家庭での指導を継続する。加えて、教育講座や聖書講座などでの機会を設け、保護者来校の機会をとらえて啓発活動を行うようにする。

また、挨拶に関する指導に関しては、校内では教員自らが率先して児童に大きな声で挨拶を行うと同時に、挨拶強調週間を利用し、自ら進んで挨拶できる児童を育てるようにしたい。挨拶は人と人とを結ぶ第一歩であると定義し、校内だけでなく、校外でも自然と挨拶ができる環境作りと意識をもたせるようにする。

第三者評価／学校関係者評価

○登下校の指導や挨拶の実践は、本当に毎日の課題となる。毎日信念を持って、根気強く指導を続けることが大事だと思うが、挨拶やマナーが人間としての基本であり、生涯を通じて大事だという確信を持っていれば、指導も苦にならないと思う。教員同士、そして保護者の理解と協力が必要で、今回初等部児童が電車で座らないという実践は、素晴らしい。やはり基本は大人から挨拶や声掛けをすることだと感じる。

○登下校に関する指導や学校生活における指導などさまざまな指導を工夫し実践していることは評価できる。今後は「改善の具体的方策」に示されているように「教員、児童、保護者が一丸となって」取り組むこと、「人と人とを結ぶ第一歩」としての挨拶の指導を大切にすることなどが実現されることを期待する。

「生徒指導」における最大の問題は、「現状の説明」に取り上げられている「教員同士の意思疎通」ができていないことである。細部にわたり共通理解を図るよう努めなければならないであろう。

○児童に『社会の一員』であることを自覚し、行動できるように日々指導を続けていることは評価できる。

児童への規則遵守の徹底がまだまだできていないのは残念なことである。教員同士の意思疎通を図り、情報を共有し、共通理解しながら指導を徹底して欲しい。

挨拶は、教師と児童、児童同士等の人間関係を深める上で基本となるものであり、すべての児童が自ら進んで笑顔で挨拶できるよう取り組んで欲しい。

- 今年度は特に登下校のマナー指導に尽力されたと感じている。普通の公立小学校であれば、集団登校や地区の保護者のサポートも手厚く、また、バスや電車を使うことなく徒歩での通学となるが、初等部では6歳の段階で公共交通手段、それも通勤ラッシュ時に、それを使って登校しなければならない。それを指導し、安全を守ることに多大な力を払われ、努力していることに敬意を表す。
- 生徒指導の成果について、教員の評価と保護者の評価の間のずれがやや大きいように思う（挨拶やマナーの指導、人間関係への配慮）。しつけについては学校だけの責任とはいいかねるが、この理解のずれに関して保護者側とのコミュニケーションをより積極的にはかる必要があるように思う。

学校評価シート(重点的な課題)

【研修】

重点的に改善に取り組む課題

教師力向上と初等部での Mastery for Service の実践

具体的な取り組み内容

- 公開授業、および研究授業の実施…学年ごとに研修集団を形成し、全クラス担任が授業を行う。指導案検討会、研究授業、事後討議会を伴う研修授業を学年ごと計6回行い、全教員が参加する。
- 校内研修計画の確立…キリスト教研修、救急救命法の研修、児童理解研修会といった実践的な研修の機会を計画的に多く持てるようにする。
- △初任者研修計画に基づく教師力の育成…指導担当者を設定し、研修授業と連動し、継続した指導体制を整える。

取り組み内容に関するの評価・分析

- 教員対象アンケート「授業研究を積み、質の高い魅力的な授業を展開できるよう努めている」に対する肯定的な回答の割合が 78.3% (目標値 70%、昨年度 64.0%) であった。各学年1回の全員参加の研究授業会を持ち、学級担任は一回以上の公開授業を行った。学年集団での研修体制をとったことで、児童理解がより進み、指導案作成時の意見交換も活発になるなど、授業研究の質が高まった。また、直接的に同じ学年の学習指導に活かしやすかったことも実践にプラスと働いたと言える。
- 教員対象アンケートでの質問「研修部の教員研修計画に基づき、授業研究や公開授業を実施している」に対する肯定的な回答の割合が 95.8% (目標値 80%、昨年度 80%) であった。キリスト教研修、救急救命法の研修、児童理解研修会といった校内研修会だけでなく、兵庫県私立小学校連合会や西日本私立小学校連合会の研修会にも全員出席を基本として参加してきた。また、初めての学校公開会(授業公開)に向けて、研修紀要や当日の指導案集を作成したりするために、研修委員会の研修計画に基づいて取り組むことができていた。
- △児童対象アンケートでの質問「授業はわかりやすいですか」に対する肯定的な回答の割合が 87.5% (目標値 90%、昨年度 91.8%) であった。初任者研修計画に基づいて取り組みを進めてきたが、残念ながら、目標とした数値には届かなかった。当該クラスのデータからもまだまだ改善の余地が伺える。また、初任者以外が担当するクラスや授業においても同様に改善する必要があると感じている。具体的には、初等部としての授業の在り方や作法、いわば、初等部の学びの文化を構築していくことが今後の課題である。
- △保護者対象アンケートでの質問「学校は、楽しく分かりやすい授業にするために工夫をしている」に対する肯定的な回答の割合が 76.5% (目標

値 85%、昨年度 73.6%) であった。昨年度の値を上回ったが、目標とする値までには至らなかった。保護者は参観授業の様子を見たり、児童から授業の様子を聞いたり、単元テストの結果を確認したりして、アンケートに答えている。4 分の 1 の保護者から「現状では不十分」という回答を得たことは、課題として重く受け止めなければならない。今後に向けて、まず、どの子にもわかりやすい指導技術の向上が挙げられる。指導法や教具、教材の工夫などについての研修の機会を校内研修、個別の校外研修などで進めていく。また、児童が授業の中で「わかった」「楽しい」と実感できるような一人一人の児童に寄り添った授業の在り方を探っていく。さらに、教員間の連携をより高め、相談や協力がスムーズに進められるような雰囲気や体制をつくっていく。

第三者評価／学校関係者評価

- 公開授業は、非常に意味のあるものだと思う。学校生活の基本は授業なので、子どもたちの心に染み入る、よりわかりやすい授業を、お互いに研究し合い進めていく姿勢は、今後どの学校においても必要であると考えられる。全教員が公開授業を受け持ち、授業の改善に取り組んでいる熱意と意義は、きっと子どもや保護者に伝わっていると確信できる。
- 初等部にとって、初任者を含む若い教員の教師力の向上が喫緊の課題であろう。本年度そうした認識に立って研究授業の実施やさまざまな研修計画の立案がなされたのは高く評価できる。
ただ教師力の重要な柱の一つである授業力（授業構築力）に絞っても、初任者のみならず、すべての教員の力量向上をめざすことが必要であろう。そのためには多くのことを総合的・計画的に配慮しなくてはならない。たとえば、授業力をどうとらえるか、教科の特色を踏まえた教材研究の在り方はどのようなものか、研究集団の構成をどうするか、指導者は誰か、研究成果の積み上げはどうか、児童の学力把握の仕方は、等々数え上げればきりが無い。こうしたことに対応するために、まずは初等部内部の努力に加えて本学院の特性を生かした教育学部や幼稚園・中学部などとの一層の研究連携を図ることなどが有効であろう。迅速に確かな「初等部の学びの文化を構築」するためには、初等部を核とする学内外との学びの連携を構築すべきであろう。
初等部での Mastery for Service の実践についてはより詳しく記述すべきであろう。
- 児童対象アンケートでの質問「授業はわかりやすいですか」に対する肯定的な回答の割合が 87.5%（目標値 90%、昨年度 91.8%）というのは、とても気になる。クラス経営や授業の在り方を改善していく必要があると思われる。
児童自ら調べたり、考えたり、さらには発展的な学習に取り組めるような授業の在り方を探りたい。そのためには、教員間の連携をより高め、相談や協力がスムーズに進められるような雰囲気や体制をつくって欲しい。
- 公開授業や校内研修の実践が功を奏し、肯定的な評価が上がっているこ

とは素晴らしい。授業が「楽しく分かりやすい」ものにすることはどの教員も考えている一番の課題であるが、特に小学校のレベルで「楽しい」と感じるのはどういうことかは、全児童に共通するものを見つけるのは難しい。また、教科ごとの「楽しさの違い」もあり、学級担任がそのすべてをやっていくことは苦勞も多い。校内研修を継続することや、外部の研修にも積極的に参加するなど、これからも努力を続けていってほしいと思う。

- 重点的な課題について、目標値を定めて努力され、それなりの成果を挙げていることは評価できます。今後もこのような「評価—課題の発見—改善目標の設定—課題克服の実践—評価」のサイクルでの改善に努力してください。

2012年度 学校評価 実施項目一覧（初等部）

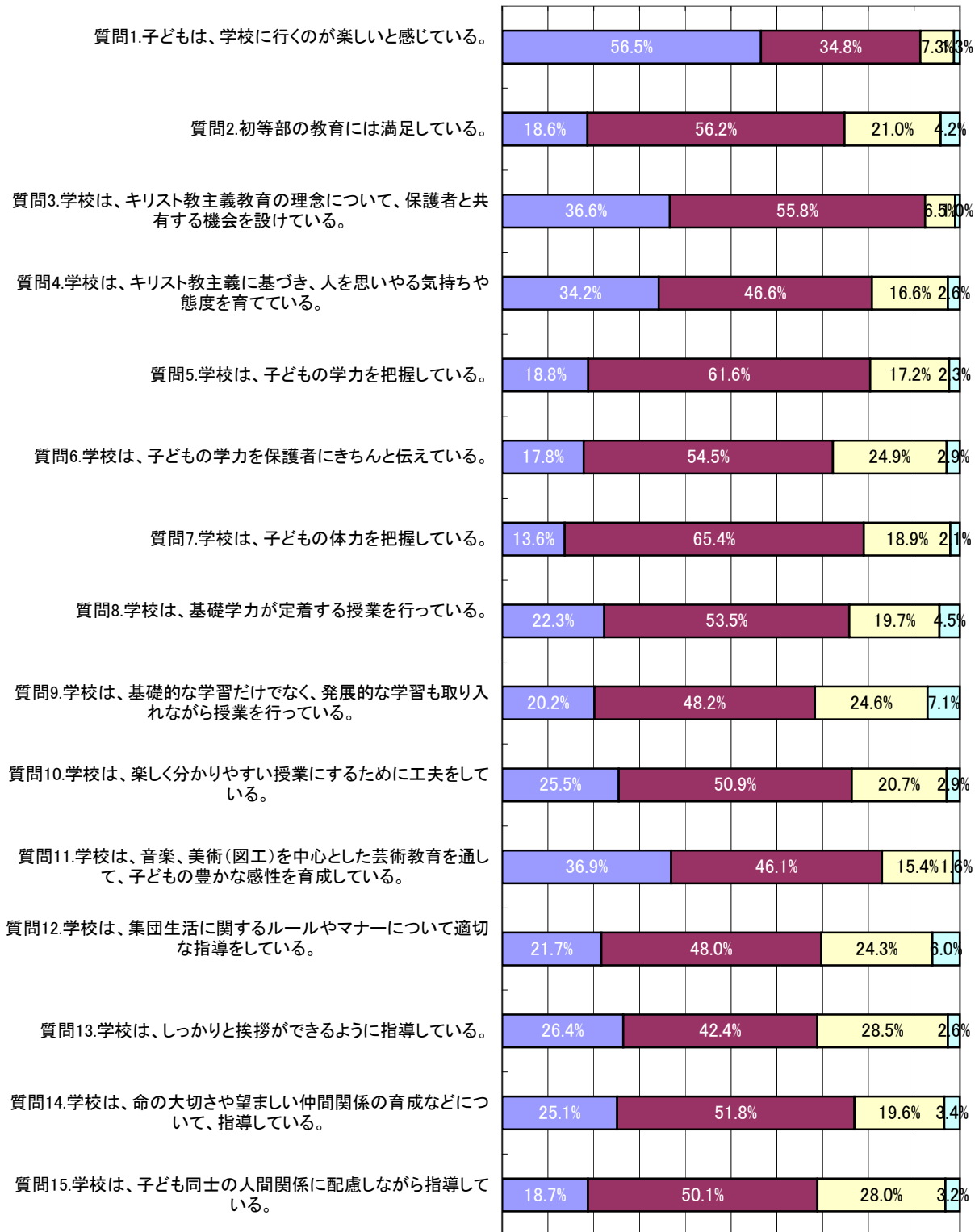
大項目	小項目	目標	アンケート			選択肢（児童用）
			教職員用	保護者用	児童用	
初等部全般				1. 子どもは、学校に行くのが楽しいと感じている。 2. 初等部の教育には満足している。	1. 学校は楽しいですか。	とても楽しい／楽しい／ あまり楽しくない／楽しくない
独自	キリスト教主義教育の理念の共有	教職員間でキリスト教主義教育の理念を共有する。	1. 私は、礼拝や研修を通してキリスト教主義教育の理念を共有している。	3. 学校は、キリスト教主義教育の理念について、保護者と共有する機会を設けている。	2. こころの時間や聖書の勉強は大切なことだと思いますか。	とても思う／思う／あまり思わない／思わない
	キリスト教主義教育の推進	キリスト教主義教育を学校生活の中で具体化する。	2. 学校はキリスト教主義教育を学校生活の中で具体化している。	4. 学校は、キリスト教主義に基づき、人を思いやる気持ちや態度を育てている。		
ガイドライン	児童の学力・体力の的確な把握	評価規準に基づき、的確に児童の学力を把握する。	3. 私は、児童の客観的な学力把握に努めている。	5. 学校は、子どもの学力を把握している。	—	—
		評価規準を設定し、それに基づく的確な評価を行う。	4. 私は、評価規準により、的確な評価を行っている。	6. 学校は、子どもの学力を保護者にきちんと伝えている。	—	—
		運動能力テスト等を通して、児童の体力、運動能力を把握し、体力・運動能力の向上に資する。	5. 私は、児童の客観的な体力把握に努めている。	7. 学校は、子どもの体力を把握している。	—	—
	各教科の特性に応じた授業への工夫と児童の興味・関心に応じた授業展開	基礎的、基本的な内容の定着、および発展的学習の展開のため6年一貫シラバスを作成し充実させる。	6. 私は、シラバスによる計画的な授業を行い、児童にその内容を定着させている。	8. 学校は、基礎学力が定着する授業を行っている。 9. 学校は、基礎的な学習だけでなく、発展的な学習も取り入れながら授業を行っている。	3. 授業では、新しいことをたくさん知ることができますか。	とてもできる／できる／あまりできない／できない
		魅力的な授業づくりのための工夫。	7. 私は、授業研究を積み、質の高い魅力的な授業を展開できるよう努めている。	10. 学校は、楽しく分かりやすい授業にするために工夫をしている。	4. 授業はわかりやすいですか。 5. 授業では、自分から調べたり、考えたりすることが多いですか。	とてもわかりやすい／わかりやすい／ わかりにくい／とてもわかりにくい とても多い／多い／少ない／ない
	芸術文化活動	様々な芸術のそれぞれのよさを見出すとともに、自分の願いをこめて、音楽作品、美術作品をつくりあげる喜びを感じ取る。	8. 学校は、音楽、美術（図工）を中心とした芸術教育を通して、児童の豊かな感性を育成するよう努めている。	11. 学校は、音楽、美術（図工）を中心とした芸術教育を通して、子どもの豊かな感性を育成している。	6. 音楽や図工の授業は楽しいですか。	とても楽しい／楽しい／あまり楽しくない／楽しくない

2012年度 学校評価 実施項目一覧（初等部）

	大項目	小項目	目標	アンケート			選択肢（児童用）
				教職員用	保護者用	児童用	
ガイドライン	生徒指導	社会の一員としての意識についての指導	挨拶や時間厳守など、社会生活をする上での基本的なマナーについて指導する。	9. 私は、挨拶や時間厳守など、社会生活をする上での基本的なマナーが児童に身につくよう適切に指導している。	12. 学校は、集団生活に関するルールやマナーについて適切な指導をしている。 13. 学校は、しっかりと挨拶ができるように指導している。	7. 学校のきまりを守って生活していますか。 8. だれにでも元氣よくあいさつをしていますか。	よくできている／できている／あまりできていない／できていない よくできている／できている／あまりできていない／できていない
		命の大切さや良好な人間関係などについての指導	命の大切さや良好な人間関係構築など、社会の中で生きる上で大切なことについて指導する。	10. 私は、命の大切さや良好な人間関係をつくることなどについて、学校生活の中で指導している。	14. 学校は、命の大切さや望ましい仲間関係の育成などについて、指導している。	9. 学校で、 ^{いのち} 命の大切さやなかまの大切さなどについて学んでいますか。	よく学んでいる／学んでいる／あまり学んでいない／学んでいない
		豊かな人間関係づくりに向けた指導	豊かな人間関係づくりのために、適切な指導を行う。	11. 私は、児童間の人間関係を円滑にするための配慮、指導をしている。	15. 学校は、子ども同士の人間関係に配慮しながら指導している。	10. 思いやりのある友だちが多いですか。 11. 友だちが困っていたら、 ^{たす} 助けていますか。 12. 友だちの ^{いけん} 意見や考えをよく聞いていますか。 13. 相手の ^{あいて} 気持ちを考えて ^{きも} 行動する ^{こうどう} ことができますか。	とても多い／多い／あまり多くない／多くない よくできている／できている／あまりできていない／できていない よく聞いている／聞いている／あまり聞いている／聞いていない よくできる／できる／あまりできない／できない
ガイドライン	研修（資質向上の取組）	授業研究の継続的实施など、授業改善の取組み	授業研究を継続的に実施し、授業改善に取り組む。	12. 私は、研修部の教員研修計画に基づき、授業研究や公開授業を実施している。	-	-	
			授業研究会、交流授業を継続的に実施し、各教諭の授業力を向上させる。	13. 私は、授業研究や公開授業を通して、自身の授業力の向上に努めている。	-	-	-

2012年度 学校評価アンケート集計結果
(初等部・保護者)

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



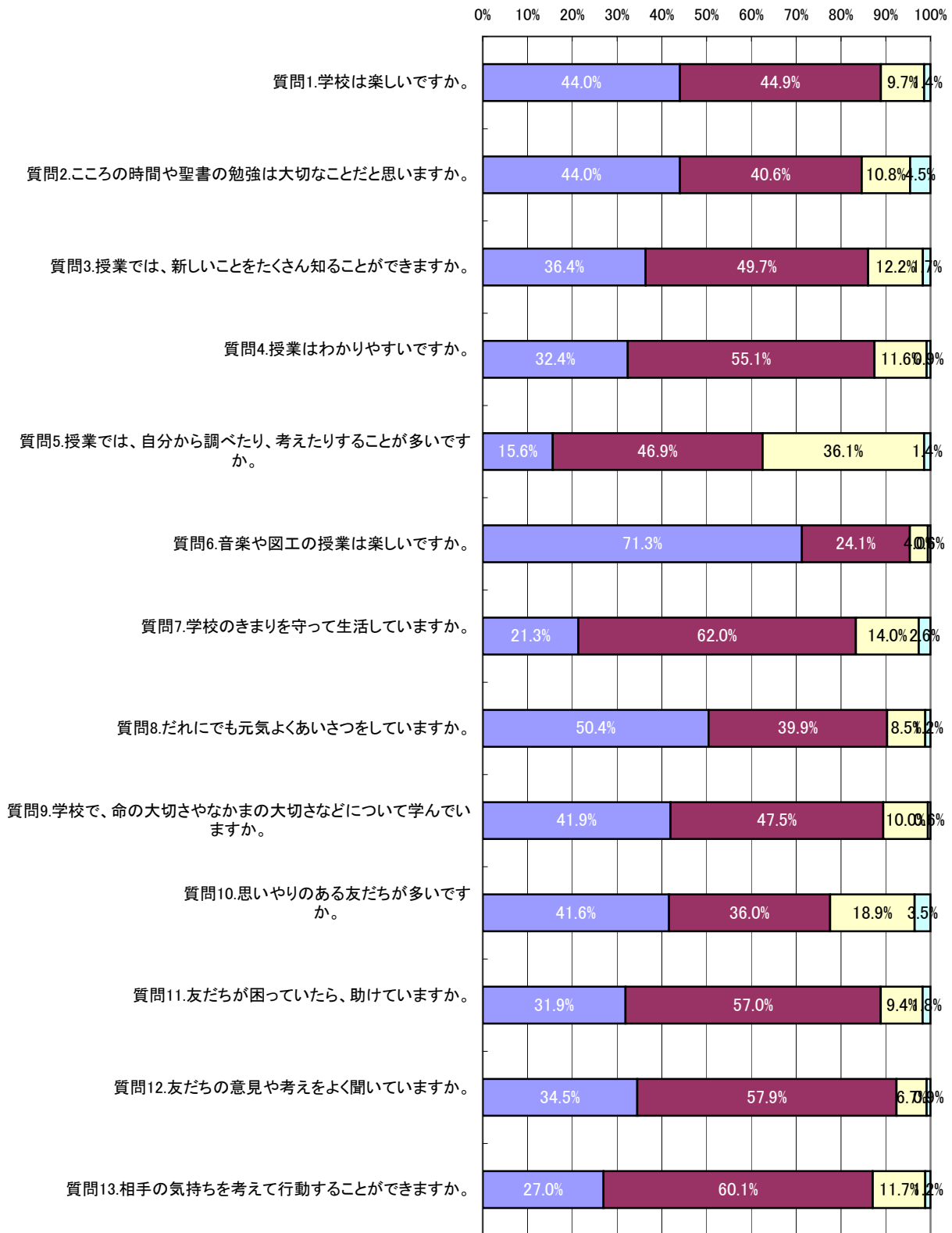
■ 回答番号1: 強く思う

■ 回答番号2: どちらかといえば思う

□ 回答番号3: あまりそう思わない

□ 回答番号4: まったくそう思わない

2012年度 学校評価アンケート集計結果
(初等部・生徒)



■回答番号1

■回答番号2

□回答番号3

□回答番号4